

平成22年(2010年)7月8日  
山口県病害虫防除所

1 病害虫名 キクえそ病  
(病原ウイルス：トマト黄化えそウイルス (*Tomato Spotted Wilt Virus*; TSWV))

2 特殊報の内容 新発生

3 発生経過

(1) 発生確認月日：平成22年6月17日

(2) 発生地域：萩市

(3) 発生状況：

萩市の施設栽培のキク（品種：神馬、優花）において、株の上部から中部の葉にえそ症状を生じる障害が発生した。症状からウイルスによる病害の疑いがあったため、ELISA法により検定を実施した結果、トマト黄化えそウイルス（TSWV）によるキクえそ病であることが確認された。本ウイルスは本県では、平成19年3月にトマトにおいて発生が確認されている（平成19年3月30日付け病害虫発生予察特殊報第2号参照）。

(4) 他県での発生状況

本病は平成5年夏頃に静岡県で初発生し、その後、全国各地で発生が確認されている。

4 本病の特徴

(1) 病徴

病徴は主に生育の後期から着蕾期にかけて現れるが、感染した親株由来の苗では生育初期から現れる。葉に退緑斑、えそ輪紋、えそ斑を生じ（図1、2）、やがて黄化して枯れる。茎にはえそ条斑を生じ（図3）、甚だしい場合には茎が湾曲し奇形となる。



図1 葉の退緑斑  
(品種：神馬)



図2 葉のえそ症状  
(品種：神馬)



図3 茎のえそ症状  
(品種：優花)

## (2) 伝染経路

ア アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ネギアザミウマなど）の幼虫がウイルスを吸汁獲得し、成虫によってウイルスが永続伝搬される。特にミカンキイロアザミウマの伝搬能力が高いとされる。

イ 病株から採穂して育苗すると、全ての苗にウイルスが伝染する。

ウ 管理作業等による接触伝染の可能性は低い。種子伝染、土壌伝染はしない。

## (3) 宿主範囲

本ウイルスの宿主範囲は非常に広く、国内では主に下表の植物で自然感染が確認されている。

表 国内で確認されたT S W Vの主な自然感染植物

科名	植 物 名
野菜類	キク、シュンギク、レタス、トマト、ピーマン、ナス、トウガラシ、ネギ、ホウレンソウなど
花卉類	アスター、ガーベラ、ヒヤクニチソウ、シネラリア、ダリア、マリーゴールド、ニューギニアインパチェンス、インパチェンス、ハウセンカ、トルコギキョウ、バーベナ、シクラメン、センニチコウ、アルストロメリアなど
雑 草	ノゲシ類、セイタカアワダチソウ、タンポポ、ヒメジョオン、ヨモギ、オニタビラコ、イヌホオズキ、イヌビユ、ハコベなど

岡山県平成16年度病害虫発生予察特殊報第2号をもとに作成

## 5 防除対策

### (1) 物理的および耕種的防除

ア 親株には健全株を用いる。また、発病が見られたほ場の株は、病徴が無くても親株に使用しない。

イ 発病株は伝染源となるので見つけしだい速やかに除去し、ビニール袋に密閉するなど適切に処分する。

ウ ほ場内および周辺の雑草はアザミウマ類の増殖源やT S W Vの伝染源となるので、除草を徹底する。

エ 施設の開口部に防虫ネット（0.4mm以下）を設置し、アザミウマ類の侵入を防ぐ。

オ 栽培終了後、施設を密閉し、作物や雑草を枯死させてアザミウマ類を死滅させる。期間は夏は7～14日、春秋は14日以上とする。

### (2) 薬剤防除

ア アザミウマ類の防除を実施し、ハウス内での感染防止及びハウス外への拡散防止を図る。

イ 花き類及びキクでアザミウマ類に登録があるベストガード粒剤、オンコル粒剤を定植時に施用し、アザミウマ類の発生を抑制する。

ウ アザミウマ類の発生を確認した場合は、スピノエース顆粒水溶剤、トクチオン乳剤、アフーム乳剤、プリンスフロアブル、ハチハチ乳剤などで防除する。

エ アザミウマ類は薬剤抵抗性が発達しており、有効薬剤は地域、ほ場によって異なることがあるため、薬剤散布後は必ず効果を確認する。